

# 「さまよえる町」に生きる！

## 原発禍——被災者それぞれの「あの日」

連載③

避難先の会津若松で、慣れない「雪の季節」を迎えた大熊町の人々。多くは原発に追われた人々であり、その悲劇のみが語られがちだが、地震による家の倒壊、大津波による家族の死、そして放射能災害の「三重苦」をそのまま背負った人々もいる。その話にも耳を傾けたい。

## 三山 喬

●みやま・たかし 1961年神奈川県生まれ。東京大学経済学部卒業。朝日新聞記者を13年間務めたのち退社し、南米ペルーを拠点にフリー記者として活動。2007年に帰国。著書に『日本から一番遠いニッポン』などがあり、今年小社から刊行した『ホームレス歌人のいた冬』は大好評を博している。

### 大津波に流された築百年の旧家

湿気を帯びたぼた雪が、鄙ひなびた商店街に静かに舞い落ちる。十二月十七日、会津若松市。土曜日で閑散とした空き校舎Ⅱ大熊町役場出張所とは対照的に、隣接する体育館は扉が開放され、いわきナンバーの車で乗

り付けた避難町民が次々と吸い込まれてゆく。この日は、定期的に行なわれる援助物資の配給日だった。

「僕らはあそこには行けないんですよ」

誰もいない議会事務局で待つてくれた松永秀篤町議は、苦笑交じりにそう漏らした。

「もし行ったら、『お前ら、給料を

もらってるのに何だ』って叱られちゃう。以前、同僚の議員が二、三人物資をもらおうとして、町民に囲まれちゃったらしいです」

みんな、相当に苛いらだ立っているのですね——。

松永は無言で肯うなずいた。

ひと月前に行なわれた町議選では、何とか議席を維持したが、ここ数カ

月間、住民から注がれ続けている刺々さげさげしい視線は、痛いほど感じている。

「我々だって、何もしてこなかったわけじゃない。国への働きかけなど、やれることはやってきたつもりだけど、伝える努力が足りなかったんでしょね。議会は何もしていない。

一旦、そう思われてしまったら、なかなか印象は変えられない」

だがこの日は、そういった話を聞きに来たわけではなかった。九カ月前、大熊町や福島、東北を、さらに言えば日本全体の状況を一変させた「あの日」の出来事について、松永の眼に映った光景を語ってもらったのだ。

この日の朝刊には《原発事故 収束を宣言》という見出しが躍っていた。野田佳彦首相が前日、発表した「冷温停止状態の達成」を伝える記事である。前々日には、原発周辺を年間放射線量によって「長期帰還困難区域」「居住制限区域」「解除準備区域」に三分割するという、政府の方針も報じられていた。

前者はどう見ても形式的な辻褄合わせだし、後者に関しても、はるか以前から予想されていた話に過ぎな

い。大方の町民は冷ややかにそう受け止めていたが、メディア的に見れば、こうした「ひと区切り感」があるためか、あるいは、年末特有の回顧報道としてなのか、ここにきて、あの「3・11」を振り返る特集がまた目立ち始めていた。

福島における震災に関しては、地震による倒壊、津波、そして放射能災害の「三重苦」という言い方が当初からされてきた。そう、原発事故の衝撃のあまりの大きさに、つい忘れてしまいそうになるのだが、大熊は、大津波による被災地でもあった。宮城や岩手の沿岸部ほどの規模ではないものの、津波に飲み込まれた町民の死者・行方不明者も計十二人に上っている。

町の沿岸部・熊川地区で先祖伝来の家屋敷を守り続けてきた松永も、大津波によって自宅を失ったひとり



建物が根こそぎ消えた熊川地区の津波被害跡（大熊町役場提供）